

「インタビュー」脚本家

倉本 聰さん

ホスピスや 緩和ケアは もつとあるべき

「富良野にホスピスを」と題してのトークライブが4月、脚本家で尊厳死協会の顧問も務める倉本聰さんの活動の拠点、北海道・富良野で開かれ、会場に駆けつけた300人ほどを前に「ホスピスや緩和ケアが都市部に集中して地方では受けられない状況を何とかしたい」などと訴えました。トークライブの後、倉本さんに、語り切れなかった「終末期医療のあり方」や、90歳を迎えて感じる「死」に対する切実な思い、さらに富良野の自然の中の暮らしやテレビドラマの今、などについてもうかがいました。

インタビュー・構成／会報編集・郡司 武（写真も）



——今日のトークライブは「富良野にホスピスを」というテーマですが、倉本さんの切実な思いが伝わってきました。富良野の地で40年近く苦楽をともにしたスタッフの「コージさん」が4年前、半分のたうち回るような苦しみの中で壮絶な死をとげたこと（別掲7ページを参照）や、義理の弟さんの緩和ケアでの状況などを話されていましたが、それが今回のテーマ「富良野にホスピスを」のきっかけでしたか。

倉本 それは大きなきっかけでしたけど、それほどじゃないですね。——先ほどのトークライブでも紹介されていましたが、北海道ではホスピスや緩和ケア病棟がこの15年で2倍に増えて22になったそうですけど、ここ富良野にはないんですね。

倉本 そうなんです。ないです。富良野には協会病院という総合病院がありますけど、ここには主に、旭川医大の大学病院から派遣された医師がとめているようです。ホスピスのような終末期医療の施設は都市部に

に片寄っていて、緩和ケアは、富良野のような地方では望んでも受けられない。そういう現状なんです。ホスピスのような施設は、もつとあるべきだと、僕は常々、思ってきました。

——倉本さんは以前から終末期医療に関心がありでしたか。

倉本 以前手がけた「風のガーデン」でも末期がんに侵された医師のドラマを書いてまして、ずっと終末期医療とか緩和ケアに関心はありましたから、富良野にもホスピスがぜひ欲しいと。そういう思いから企画したトークライブです。

——なるほど。その強い思いは、以前からずっとあったということですね。

倉本 でもね、ホスピスはけっこうお金もかかる。医師はもちろんですが、看護師など医療スタッフ、ボランティアも必要ですね。多くの人数が必要なんです。私たちだけでできるわけではないし、市など自治体も協力してくれないとダメでしょ。今日のトークライブには市長にもぜひ来て聞いてほ

しかった。

「1番行きたいのは 美容整形らしい」

——倉本さんが4年前、協会の会報「リビング・ウイル」（182号）に寄せられた緊急提言「そしてコージは死んだ」では、痛み・苦しみを取り除いてもらいたいというコージさんの望みも叶わずに、苦痛の極限のなかで亡くなられた経緯がリアルに描かれています。コージさんの最期に倉本さんが看護師さんに「楽にできませんか、何とか楽にしてやってください」と懇願しましたが、かないませんでした。安楽に死なせてあげてほしいとの願いは届きませんでしたね。

倉本 夜勤の若い看護師さんには、それ以上の麻薬の増量に踏み込む資格はなかったでしょうし、彼女たちにはおそらくそれ以上の医療判断は許されていないでしょう。——そうですね。

倉本 その晩、必死で対応してくれた看護師さんを責めるつもりは毛頭ありませんけど、その時ね、今、目の前に繰り広げられていることは、はたして人道的と言えるのかと思っただね。楽にできるのにしてやらない「ことは非人道的行為ではないか、許され

北海道ではこの15年でホスピスが
2倍に増えているのに、富良野には……

倉本 聡スペシャルトークライブ 富良野にホスピスを

4月7日、北海道・富良野の「富良野演劇工場」で、「富良野にホスピスを 生きる終末医療&陽の緩和ケア」と題してのトークライブが開かれ、会場に駆けつけた約300人を前に3時間、「富良野にホスピスを」と熱く訴えました。

演壇には倉本さんの他、緩和ケア医でがん患者でもある大橋洋平さん、富良野自然塾理事でがん患者でもあるネイチャーガイドの金澤晋一さん、司会の元テレビ朝日アナウンサーの宇賀なつみさん。会場の参加者から「3時間があっという間。大きな学びになりました」の声も聞かれました。



命より大事な仕事ってある？
鼻が少し高くなったからってどうなんだろ

「電話帳から
どんどん消えていく」
—— 先ほどのトークイベントで、「今、周りに人が亡くなっていくのを見てもあまり思わなくなつて、冷たいのかも」とおっしゃっていましたね。

倉本 うーん。90まで生きてくると、「冷たい」というか、人の死が珍しくなくなるんですよ。「ああ死んだか」という思いかな。「心がさわがない」というか。僕の電話帳のなか

変わったようにしゃべりました。そこは酒もたばこもいんです。そこで何か月も生きて、息を引き取りました。和やかな死に顔でした。

倉本 若い時はそうじゃなかったですよ。今とは全然違いましたね。

——「北の国から」の出演者でも先日、いしだあゆみさんが亡くなりましたし、田中邦衛さん也大滝秀治さんもすでに亡くなりました。それから萩原健一さんも緒形拳さん

「『安楽死』が
タブーになっている」
—— さっきの「痛みや苦しみからの解放」に関してですけど、安楽死についてはどう思われますか。

倉本 そう思うね。私は90歳になりましたけど、もう十分生ききったと思ったときは、

倉本 医者が命に関わらなくてどうするの？ 命より大事な仕事ってある？ 鼻が少し高くなったからってどうなんだろ。美容医療でもうけている医師がいる一方で、日夜、命と向き合っている医師がいる。緩和ケア医も頑張っている。そうした矛盾がよくわからないなあ。

—— 正面から取り上げ、考えるべきだと…。ところで7年前の会報（168号）のインタビューで倉本さんは、「元氣なうちに最後の『判断』をしておきたい」とし、尊厳死については、もっと解釈を広げたいんじゃないかと話されています。生きる望みを失ったというか十分生ききったと思

倉本 そう思うね。医師の仕事は、患者を痛みや苦しみから解放してやるということではないですか。ところで今、医学部を出た学生が一番行きたい診療科は何だと思います？（間をおいて）美容整形ですよ。

—— 正面から取り上げ、考えるべきだと…。ところで7年前の会報（168号）のインタビューで倉本さんは、「元氣なうちに最後の『判断』をしておきたい」とし、尊厳死については、もっと解釈を広げたいんじゃないかと話されています。生きる望みを失ったというか十分生ききったと思

倉本 それは「緊急提言」で「医」について、こう書かれています。「もつとも引かかるのは、人命尊重という古来の四文字をいまだに金科玉条とし、苦痛からの解放というもう一つの大きな使命であるはずの医学の本文というものを『医』が忘れてはいまいか」と。

倉本 これはもつと真剣に、いろいろな角度から考えていいんじゃないですかね、日本人は。「安楽死」がタブーになっているような今の世の中はおかしいと思いますね。ちょっと話はそれますが、昔の日本人の風習として、「楢山節考」（深沢七郎著）の世界があるでしょ。日本には姥捨てとかの風習がずっとあったんですよ。世界の先住民族の間には、今でも多少、思想として残っているような気もしますね。文明社会が、そういう習慣を非科学的で人道的でないって



重いテーマについて語る、右から金澤さん、大橋さん、倉本さん、司会の宇賀さん。

そうしてもいいような気がするんですよ。「生命が一番尊い」と言うけれど、はたしてそうかなとも思わないでもないですね。

—— 「ホスピスが欲しい」ということについては、義理の弟さんの状況もあったようですね。

倉本 義理の弟が骨髄がんで何年も苦しんだ末に、最後は有馬温泉にあるホスピスに入ったんですけど、そこで想像を絶する痛みや苦しみから解放されたんです。入院直後に有馬に見舞ったとき、それまでの顔と全く違って、暗かった顔が明るくなり、人が

から、親しかった人たちがどんどん消えていきますからね。

僕、今、こういう富良野の自然の中に住んでまして、いろんな動物を見ますけど、死体というのを見ないんですよ。毎日歩いていて見ないんですから、どうなってるのかと思いますね。

—— 他の動物に食べられちゃうんでしょうね。

倉本 うん、食われるんだと思うんだけど、サーッと死体はなくなっちゃう。見たのは、この間、アオサギが鷹に襲われて食べられてるのを見たくらいかな。

—— そうですか。倉本さんは、私たち人間の存在について「必需品なのは衣もそうだし食も住もそうだけれど、それより最重要なのは空気と水で、その空気と水は森が作っている」と書かれています。

倉本 森が原点でしょうね、僕に言わせれば。だけど森はいろんなものを含んでいますから、「自然が原点」といったほうがいいかな。

—— そういう森の体験を子どもたちにも、ということ。「富良野自然塾」の活動もあるわけですね。どのくらいの人に参加されますか。

スタッフ そうですね。通年で、夏場は

90歳まで生きてくると、 人の死が珍しくなくなるんですよ

4000人ほどの小中学生や大人が参加しています。

——倉本さんは小学校時代、疎開を2回されてるんですよね。山形と岡山。

倉本 そうです。僕は東京生まれだけれど、その疎開の経験は大きいですね。でも、それ以前に、親父に連れられて「野鳥の会」の人たちと山歩きをしていたんです。親父が野鳥の会の創始者・中西悟堂さんと親友だったものだから。そのころから「自然どっぷり」でした。

「知恵から入らないと ダメでしょ」

——話はガラツと変わりますが、「北の国から」は日本のテレビドラマ史上、画期的な出来事でした。今のテレビドラマをどうみていますか。

倉本 ひどいですね。

——脚本がなってないということですか。

倉本 脚本を含め、全部ですね。脚本、演出など基礎からやり直しですね。0から始める必要があると思います。テレビでできることはまだいろいろあると思うんですが、それを探ろうとしないと思いますね。

——残された可能性を、ですか。

倉本 基礎力がないから、探りようがないんだと思います。

——基礎力を鍛えるしかないですね。

倉本 まあね。僕は「富良野塾」を26年やっただんですけど、結果的に育たなかったですね。僕の教え方が悪かったせいもあるでしょうし。

——え、そんな。



【緊急提言】そしてコージは死んだ 倉本 聡

会報182号(2021年7月)の概略



富良野塾の創設期からのスタッフで、尊厳死協会の会員でもあった「コージ」(62歳)ががんで死

んだ。ドラマ「北の国から」のログハウスや丸太小屋なども作り上げた彼が、がんに侵されたのは2年半近く前。すでにステージ4で「あと2年くらいが限界と言われた」と報告にきた。自分の家建てている最中で、「その家で死にたい」と言った。

僕はドラマ「風のガーデン」の台本の監修をお願いした縁で親しくしていた元旭川医大の緩和ケアの教授のつてで、緩和ケアの専門家のいない富良野の病院の担当医と密な連絡をとっていたことで、コージは在宅での抗がん剤治療をしつつ仕事を続けていくことになった。2年目に入り、抗がん

剤の副作用が出始め、苦痛はかなりのレベルに昇っていたはずだ。

その年の2020年11月、突然、彼は自殺を図った。刃物で首を2か所切断し、死にきれず電動ドリルで心臓を突き刺して穴を開けようとした。他のスタッフが血みどろの彼を発見し、救急車で搬送され一命をとりとめた。僕は旭川から飛んできてくれた緩和医療の担当医に尊厳死協会の彼の会員証を示し「苦痛からの解放」を懇願した。緩和ケア医は「わかりました」と言ってくれたが、心配で内科の医師に相談した。医師の答えは「新薬のできる望みもあるので希望を捨てないように」だった。それを元緩和ケアの教授に電話したら「内科はまだそんなこと言ってるんですか」と怒った。

コージのがんは1月、胃に転移したが、苦しみに耐えながら懸命に在宅での闘病を続けた。ステロ

イドと麻薬の投与も始まったが、明確な効果は認められなかった。

97から98あるべき血中の酸素濃度も3月14日、60まで下がり、耐えかねた彼は自ら救急車を呼んで富良野協会病院に入院した。コロナの臨戦態勢のなか頼み込んで、付き添いのスタッフを病院に張り付けてもらうことを許された。17日午前1時、そのスタッフから電話があり駆けつけた。コージはベッドの上で半分のうち回っていた。酸素吸入のマスクをいくら吸っても酸素が体内に入っていないようで、声にならない声をあげ、空しく荒い呼吸音だけが病室を震わせていた。血中酸素濃度は

倉本 テレビドラマへのアプローチの仕方がなっていないとか。僕なんか、誰にも教わってないんですよ。師匠なんていないですよ。ただ優秀な先輩たちの本を読み漁ってきたわけです。セリフは、街中の人たちの会話をメモしながら始めましたからね。そういう意欲を持つ人が少ないですね。

——テレビドラマの再生はありますか。

倉本 知識じゃなくて知恵から入らないとダメでしょうね。参考書とか知識から入ろうとすると先輩のマネになっちゃいますよ。——なるほど。今日は「人生の最終段階」からドラマのお話までいろいろお伺いしました。お疲れのなか、ありがとうございます。

くらもと・そう

1935年、東京生まれ。脚本家、劇作家、演出家。本名は山谷馨。東京大学文学部美学科を卒業後、59年ニッポン放送に入社。63年に退社後、脚本家として活躍。74年に北海道に転居。77年に富良野に移住し富良野を舞台にしたテレビドラマ「北の国から」で大きな話題に。84年に若手俳優と脚本家を養成する「富良野塾」を創設し、26年にわたって主宰した。2006年より「富良野自然塾」も主宰し、閉鎖されたゴルフ場に植樹をし、元の森に戻す自然返還事業と、そのフィールドを使った環境教育プログラムにも力を入れている。代表作に「前略おふくろ様」「昨日、悲別で」「優しい時間」「風のガーデン」「やすらぎの郷」他多数。映画「駅—STATION—」「海の沈黙」なども。

40まで下がっていた。比類のないほど凄惨で残酷な時間だった。

「楽にできませんか、何とか」と看護師さんに懇願したが叶わなかった。こんなむごいことがあっているのか、楽にできるのになしてやらないことは拷問であり非人道的ではないか。許されていいの。

「苦痛からの解放」というもう1つの大きな使命であるはずの「医学の本文」を「医」が忘れてはいまいか。

「命を永びかせる」ことにあまりにこだわりました。たとえば尊厳死・安楽死の問題をタブーとし真剣な議論の俎上にのせないで逃げていることに、僕は違和感を感ずる。

その日の昼すぎ、コージは息を引き取った。